



2013.11.

11月 ちとせだより

神戸YMCAちとせ幼稚園

早期教育といわれる様々な学習やお稽古事には、点数といった数値化された基準をもとに評価されるものが多くあります。そして、子どもたちはその習得、上達に合わせて褒められ、さらにやる気を起こすことになるでしょう。親に褒められること、認められることが子どもにとっては嬉しく、親の期待に沿えるように必死に頑張っているのです。そして、そこでは「～が出来る」ということから生み出される自信を獲得していきます。もちろんこういった自信に意味がないわけではありませんが、幼児期に獲得する自信が、このような他と比較できる成果から生まれる「根拠のある自信」だけでは長い人生を本当に喜びのあるものにするには困難なことを忘れてはなりません。そのような人間は、ともすれば自分より劣っている者に対して優越感を持ち、自分よりの優れている者に対しては劣等感や憎しみさえ持ちかねないのです。また同様に、「自分は何でも出来る」という幼児的な自己全能感に留まったまま成長してしまうことの危うさも、失敗することも悲しい思いをすることもなく成長してしまう幼少年期の課題として無視できないものです。

早期教育やお稽古事といった様々な課題に対しては、多くの場合親からはその望ましい結果には「賞賛」、望ましくない結果には「叱責」が与えられることとなり、親から子どもに対する愛情表現も、このような成果に対する条件付の愛情表現となっている場合が多く見られます。そんな中で育てられた子どもは、「～が出来る」から自分は愛してもらえ、「～が出来ない」から自分は愛されないという不安な気持ちを抱えたまま成長していくこととなります。また、受験や就職などの失敗から立ち直れず、引きこもってしまうことなども、「何でも出来る」「何でも思い通りになる」といった万能感から脱し得なかった幼少年期の過ごし方に問題があることは間違いないでしょう。

幼児期の子どもにとって必要な自信は、ありのままの自分が一人の人間として認められて、愛されているという安心感からくる自信なのです。そしてそのような子どもは、親や大人の顔色を伺うことなく生き生きとした子どもらしい表情を見せてくれますし、失敗しても落ち込むこともありません。子どもの気持ちや行動が、親の気持ちばかりに引きずられることなく、子ども自身が自らの気持ちを素直に表現し、そして自らの力で生きる喜びを感じることが大切なのです。これが、まさしく子どもが子どもらしく過ごすことが認められているということではないでしょうか。

幼稚園での子どもたちの姿が、自らが見出し創りだした喜びと楽しみに溢れ、ある時には失敗をしても、悲しい思いをしても、子ども自身が自分の力で立ち直ることが出来るのだという「根拠のない自信」を実感していくことが出来る環境でありたいと願っています。